

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 4 日現在

機関番号：12606

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24652040

研究課題名(和文)フィロストラトス『エイコネス』の古代絵画史的研究

研究課題名(英文)Philostratos' Eikones in the history of ancient painting

研究代表者

羽田 康一 (Hada, Koichi)

東京藝術大学・美術学部・講師

研究者番号：30240724

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：紀元3世紀に2人のフィロストラトスが書いた『エイコネス』(絵たち)は古代エクフラシスの代表作である。本研究では、『エイコネス』各章の記述において、造形の伝統と文学の伝統がどのように混在しているかを精細に考察し、また各作品中の複数場面を明確に区別することに努めた。個々のモチーフや描法、構図が出現したおよその年代を、場合によってはその特定の典拠まで、推定できる事例は多い。フィロストラトス『エイコネス』全80数章と、彫刻を扱ったカッリストラトス『エクフラセイス』全14章の翻訳註解に加え、エクフラシス、第二期ソフィストなどの問題についても考察し、さらに一部の章について再現図を制作した。

研究成果の概要(英文)：Eikones (Imagines), written by two Philostratos in the third century AD, is a representative work of ancient ekphraseis. For four years we have continued to investigate minutely the state of mixture of artistic traditions and of literary traditions within the description of each chapter, and to distinguish as explicitly as possible several scenes within each painting. In many cases it was possible to assume grosso modo the date when emerged individual motifs, specific painting techniques or compositions, and in some occasions we could presume their specified sources. In addition to the annotated translation from ancient Greek into Japanese of over 80 chapters of Eikones and of 14 chapters of descriptions of sculptures in Ekphraseis written by Kallistratos in the fourth century, we inquired into the problematics such as ekphrasis in general and the second sophists, and tried also to draw reconstructions for some chapters.

研究分野：古代ギリシア文化圏美術

キーワード：エクフラシス ギリシア絵画 ローマ絵画 神話画 風景画 フィロストラトス カッリストラトス
第二期ソフィスト

1. 研究開始当初の背景

大小(祖父と孫、または叔父と甥)二人のフィロストラトスによる『エイコネス』(絵たち)は、紀元3世紀に書かれた古代エクフラシス(造形作品の修辭的記述)の古典である。

『エイコネス』に関する研究は、従来主として次の二つの関心から行われてきた。一つは古典文献学の側から、いわゆる第二期ソフィストの弁論における修辭学の文献の一つとして。二つにはルネサンス以降の絵画史の側から、『エイコネス』のエクフラシスト、それに基づいてティツィアーノやプッサンが描いた絵画との比較への関心からである。

しかし何よりも最初になされるべき研究、すなわち『エイコネス』に記述された計80数点の絵画と、古代遺品の図像との体系的な比較照合は最近まで行われなかった。古代遺品の整理分類が進んでいなかったためである。そうした状況を一挙に打開したのが1981-1999年のLIMCの刊行である(*Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae* 古典神話図像事典。Supplementum 2009が最終巻)。それ以後、計80数点のうち8割ほどを占める神話的風景画と古代遺品との図像学的照合は遙かに容易になった。パドヴァのゲディーニたちによる小フィロストラトス『エイコネス』研究は、明らかにこの事典の恩恵を受けている(F. Ghedini et al., *Le Immagini di Filostrato Minore: La prospettiva dello storico dell'arte*, 2004)。

『エイコネス』と古代遺品の照合が盛んになったもう一つの要因は、陶器画ではなく、古代の大型絵画の実際の描法に近い、大理石や漆喰の上に描かれた絵画遺品の陸続たる発見と、それに対する自然科学的研究の進展である。こうして図像学とは別の視点からも研究が進んだ。パリのルーヴレたちの成果(A. Rouveret et al., *Couleurs et matières dans l'Antiquité: textes, techniques et pratiques*, 2006)、オクスフォードのカクリの科学的研究(I. Kakoulli, *Greek Painting Techniques and Materials from the Fourth to the First Century BC*, 2009)、或いはクロワヅルによる風景画の包括的研究(J.-M. Croisille, *Paysages dans la peinture romaine*, 2010)がそれを代表している。

古典文献学的手続きの上でも絵画史的註解という意味でも、これまでで最も優れた『エイコネス』の翻訳註解はシェーンベルガーによるものであるが(O. Schönberger et al., *Philostratos: Die Bilder*, 1968)、上記2つの意味で、今では不十分と言わざるを得ない。

2. 研究の目的

このような状況の下、本研究の目的は、『エイコネス』を古代絵画史の観点から、とりわ

け記述された絵画と古代の図像資料および文献資料との照合という観点から研究することにあつた。

なお本研究は代表者が構想する、より大きな研究課題「ギリシア・ローマ絵画に関する古代文献資料の集成」の一環である。

3. 研究の方法

『エイコネス』の一つ一つの記述において、造形の伝統と文学の伝統がどのように混在しているかを精細に考察し、また各作品中の複数場面を明確に区別することによって、

『エイコネス』のかなりの章を「ギリシア・ローマ絵画に関する古代文献資料」中のより早い時期に組み込むことを試みた。個々のモチーフや描法、構図が出現したおおよその年代を、場合によってはその特定の典拠まで、推定できる事例も多い。

ともに大フィロストラトスによる第一巻第6章「エロースたち」と第27章「アンフィアラーオス」を取り上げ、これに註を付す形で例示する。

「1.6 エロースたち」

(1) ほらエロースたちが林檎を摘んでいる。

【林檎園・果樹園の情景は、ロンゴス『ダフニスとクロエー』(紀元2世紀後半～3世紀前半)の、第3巻末尾から第4巻の初めにかけての記述を想起させる。フィロストラトスは紀元3世紀前半で、ほぼ同時代である。『ダフニスとクロエー』4.3.2の奉納絵馬に描かれた画題は『エイコネス』と共通しており、選択に同時代性が認められる。セメレー(L.14)、アリアドネー(L.15)、ペンテウス(L.18)、テュッレーニア人たち(L.19)。】大勢いても驚いてはいけぬ。エロースはニュンフェーたちの子供なのだし、【フィロストラトス独自の系譜づけ。一般にはアフロディーテの子とされている。】死すべき人間たちすべてを左右するが、人間の愛の対象はたくさんあるし、天上では神々の事柄も支配するからだ。庭園の至るところに芳香が満ちているのに君はまだ気付いていないだろうか。ではよく聞きなさい、言葉が林檎の香りを運んでくるだろう。【第二期ソフィストに属する語り手が、ナポリの或る別荘の絵画館で、別荘の主人の息子である10歳ほどの少年に絵解きをするという設定。絵は架空のものだが、その構図・表現・モチーフは主として前5-4世紀の大絵画におけるそれらと、主としてホメーロス、ピンダロスなどの文学におけるそれらを組合せている。】

(2) これら果樹の列はまっすぐ伸びており、その間を自由に歩くことができる。柔らかい草が小径を覆っていて、寝台／クリーナーの布団であるかのように身を横たえることもできよう。枝々の先には【サッフォーの有名な断片を踏まえている(Sappho, Lobel/Page, *Poetarum Lesbiorum Fragmenta*, fig.105a)。】金色や黄赤色、或いは太陽に似た色の林檎が生っていて、エロースたちの群みなにそれを摘むように誘っている。籬には金が鏤められ、【このモチーフはアナクレオンに先行例がある(Anakreon, 16.6)。】そ

の中の飛び道具は金製だ。エロースの群はみな箆を林檎の樹に懸けて武器を持たず、身軽に飛んでいる。色とりどりの外衣が草の上に置かれていて、無数の花々になっている。エロースたちには髪だけで十分なので、頭には花冠も着けていない。翼には暗青色／ラピスラズリ色、緋色／フェニキア色、金色のものもあって、殆ど音楽的な音調を響かせて空気を打っている。とりわけ林檎を入れる籠が素晴らしく、その周りにはたくさんの紅縞瑪瑙／サルドニクスやたくさんの翠玉／エメラルド、さらには本物の真珠が散り嵌められ、その組合せはヘーファイストスの手になるものと思う。だが樹に立てかける梯子をヘーファイストスから借りるには及ばない。エロースたちは林檎まで自分で高く飛ぶのだから。

(3) そして踊ったり走り回ったり、眠っていたり、或いはうれしそうに林檎にかぶりついたりしているエロースたちについて述べるよりも、こちらにいるエロースたちが一体どういうことを意味しているのか、見てみよう。見なさい、とりわけ美しいエロースたちが四人、他の人たちから離れたところにいて、そのうちの二人は一つの林檎を互いに投げ合っている。他の二人は一人が相手に矢を射、もう一人が射返しているが、どちらにも脅しの表情は見られず、それどころかそこを矢で貫いて貫うために互いに胸を差し出している。魅力的な謎だ。私が画家を理解できているかどうか、見て欲しい。一方は愛／フィリアー、もう一方はお互いに対する憧れ／ヒエメロスなのだ。林檎で戯れているエロースたちはのぞみ／ポトスを始めている、なので片方が林檎にキスをして投げると、もう片方は両手のひらを上にしてこれを受け止め、受け止められれば勿論これにお返しにキスをして投げ返すのだ。弓を射ている一組はすでにある愛／エロースをより強固にしている。つまり私の考えでは、林檎による戯れは愛することを始めるため、矢を射るのは望むこと／ポトスをやめないためなのだ。【林檎を投げることから愛が始まるというモチーフで最も知られているのは「アコンティオスとキューディッペー」である。アリストファネス「雲」(Aristophanes, *Nephelai*, 996-997)、ウェルギリウス「牧歌」(Vergilius, *ecl.*3.64)にも現れる。】

(4) 大勢の見物人に囲まれたあちらのエロースたちは、互いに激して一種の格闘技を戦っている。君がせがむからには、この格闘技についても説明しよう。一人が相手の背中に向かって飛んできて捕らえ、首を絞めて窒息させようとし、さらに両脚で挟んで押さえつける。こちらも諦めないで真っ直ぐ立ち上がり、首を絞めている手をほどこうと、指の一本をねじ曲げて残りの指がきつく締め付けられないようにする。指を曲げられた方は痛がって、相手の耳に噛みつく。そこで見物していたエロースたちはこの不正と規則違反に憤慨し、この噛みついた者に林檎を投げつけて石打ちの刑に処する。【1.6「アッリキオーン」

で記述された、オリュンピアにおけるパンクラティオン競技と共通する場面。フィロストラトスはスポーツをテーマに『ギムナスティコス』を著している。】

(5) あの野兎も私たちの目を逃れることはできない。エロースたちと一緒に狩をしよう。野兎は樹の下で待ち伏せをして落ちてくる林檎を食べていて、食べかけの林檎がたくさん残っている。エロースたちはこれを追い立てて騒いでいる。或るものは手を打ち鳴らし、或いは大声で叫んで、或いはクラミュス／短衣を振り回して。何人かは高く飛びながら兎に向かって叫び、何人かは足跡をつけて徒歩で後を追っている。一人は身を挺して突進するが、動物は急に方向を変える。一人は野兎の脚を掴もうとするが、捕らえたと思った瞬間に取り逃がす。みな笑いながら、一人は横ざまに、一人はうつ伏せに、一人は仰向けに倒れ、皆しくじった時の格好そのものだ。弓を射る者は一人もなく、生きたまま捕らえてアフロディーテーへの素敵な生け贄にしようとするのだ。【いくつもの場面が記述されているが、絵にどれだけの場面が描かれていると想定されているのか、判断は難しい。目の前にある絵の解説という設定から遊離した、イメージの奔流と評するべきかも知れない。こうしたまるで動画に対するような記述の仕方、いわゆる「連続様式」(Schönberger 1968)は『エイコネス』の随所に認められる。】【エロースの図像には顕著な変遷がある。前5世紀には青年の姿、前4世紀のブラークシテレースでは12歳くらいの少年、リュウシッポスでは10歳くらいの少年、ルーキアーノスのエクフラシスによって今に伝わるアエティオンの絵画「アレクサンドロス大王とロークサネーの結婚」ではついに幼児になった(Loukianos, *Herodotos sive Aetion*, 4-6。結婚は前327年で、絵はその直後)。前2世紀以降はこれらが併存する。アエティオンの絵に現れる幼児エロースたち(putti)の様々なモチーフは、ヘレニズム期の造形およびそれを受け継いだポンペイ壁画に頻繁に描かれることになる。武具を運ぶ。若い女のヴェールを取る。男を引っ張って女のところに連れてくる、等々。フィロストラトスの「エロースたち」も幼児の姿である。】

(6) 野兎について言われていることを君も或る程度知っているだろうが、野兎はアフロディーテーと大いに関係がある。言われるところでは、牝は生まれた仔に授乳している間にもまた仔を産んで、両方一緒に乳を飲ませる。さらにまた孕んで、出産していない時がない。牡の自然に従って牡は種を蒔き、生まれた仔の傍らにまた仔を作る。【ヘーロドトス「歴史」(Herodotos, 3.108.2)、アリストテレース「動物誌」

(Aristoteles, *Historia animalium*, 6.33)などに依拠した博物誌的知識の披瀝。『テュアナのアポッローニオス』などにも見られるフィロストラトスの個性である。】異常な念者たち／エラーステースたちは、野兎には或る種の愛の説得力があることを観察し、この不自然な手段を使って(=野兎を贈り物として)、愛する少年を狩り求める。【『テュアナのアポッローニオス』5.14.2では、アイソポス(イソップ)と違って詩人たちは「異常な念者／エラーステースたちや兄弟姉妹間の愛」などを語る、と非難する。】【『テュアナのアポッローニオス』6.10.3では、インド人

の自然な生活に関し、「真実は奇跡や不自然な手段（魔法、魔術）は必要としない」と言う。】

(7) まあこうしたことは間違った、愛を返すに値しない人たちに任せておこう。で、君はアフロディーテを見なさい。どこに、どの樹の下にアフロディーテはいるのだろうか。ご覧、岩が突き出た下に洞窟があって、そこから深い暗青色／ラピスラズリ色の、新鮮で飲むと快い水が流れ出し、溝を伝って林檎の木立を潤している。そこにアフロディーテの聖所を設けたのはニュンフェーたちだろう。ニュンフェーたちをエロースたちの母とし、多くの子どもたちを齎したのだから。銀の鏡、金の小さなサンダル、それから金の留め金がいくつかそこに懸かっているが、それらにはみな意味がある。アフロディーテのものであることは文字で書き込まれてもいるが、さらにそれらがニュンフェーたちの捧げ物であることを告げているのだ。そしてエロースたちは林檎の初穂を捧げ、自分たちの庭園がずっと美しくあるようにと、聖所を取り囲んで祈っている。【このあたりの記述も『ダフニスとクロエー』を想起させる。第一巻冒頭に近いあたり(1.4)。】

「L27 アンフィアラーオス」【フィロストラトスは「アンフィアレオス」と表記している。】

(1) 二頭立ての戦車が——というのは勇敢なヘクトール以外、英雄たちは四頭立ての戦車を使うことはできなかったからだが——、【美術では戦車を四頭立てで描くことが多い。ヘクトールの戦車を特に「四頭立て」とするのは『イーリアス』(II. 8.185)とフィロストラトス『ヘーローイコス』(2.10; 2.16)。『イーリアス』では四頭の馬の名を呼んで話しかけているが(クサントス、ポダルゴス、アイトーン、ランボス。それぞれ狐色の、足が白い、赤毛の、白い、の意)、ホメーロスでは戦車は二頭立てが原則なので、『イーリアス』のこの部分を後世の挿入とする指摘が古代から行われている。】テーバイから帰るアンフィアラーオスを乗せて走る、その時大地が割れたとされ、アンフィアラーオスはアッティカで予言を行い、賢者の中の賢者として真実を語るようになる。ポリュネイケースのためにテーバイの王権を手に入れようとした七人は、アドラーストスとアンフィアラーオスを除いて帰郷できず、カドモスの地に留め置かれた。カパネウス以外は槍と石と斧で殺され、カパネウスはおそらく大言壮語でゼウスを打ったため、雷に打たれたとされている。

(2) 以上のことは別の話であり、この絵は自分の月桂樹の枝とそれに付けた羊毛の輪飾りとともに【原文は「ステンマとダフネー」。従来「鉢巻と月桂樹」(Fairbanks 1931)、「予言者の鉢巻と月桂樹」(Schönberger 1968)、と訳されている。ステンマには月桂樹の冠という意味もあるので、「月桂樹の冠と月桂樹の枝」かも知れない。いずれにせよアポローンに関わる予言者の持物である。】地下へと逃れるアンフィアラーオスだけを見るように命じている。白い馬たち、車輪の激しい回転、すべての鼻孔から放たれる馬たちの呼吸、口から出

た泡の撒かれた地面、激しく靡く鬣。汗に濡れそぼった馬たちに降りかかる軽い土けむりは、馬たちを、あまり美しくはななくともより迫真的に見せている。アンフィアラーオスは他の武具は身に着けているが、頭部をアポローンに捧げたため兜だけは被らず、聖なる、そして予言者らしい眼差しを投げている。

【造形では馭者バトーンをアンフィアラーオスの隣に描く例が多いが、フィロストラトスはピンダロスとともに言及していない。二頭立ての戦車と合わせ、フィロストラトスは造形伝統よりもホメーロスとピンダロスの文学伝統の方を尊重しているようだ。】

(3) 青緑色の女たち——海たちだ——に囲まれた若者の姿のオーローポスも描かれている。アンフィアラーオスの思索の場所／フロンテイスターリオンである聖にして神々しい裂け目も描かれている。【オーローポスの山腹に洞穴があった。「フロンテイスターリオン」はおそらくアリストファネスの造語。瞑想、思索の建物。「雲」でソクラテースたち哲学者の道場をこう呼んだ

(Aristophanes, *Nephelai*, 94)。】そこには白い衣を着たアレーティア／真実がおり、【アペッレースはその絵画作品「誹謗」にアレーティアを描き入れたと伝わる(Loukianos, *De calumn.* 5)。】またそこには夢たちの扉があり——神託を求める者たちはそこで眠ることが必要なのだ——、また寛いだ姿のオネイロス／夢自身が黒い衣の上に白い衣を着て描かれているのは、夜も昼も活動するからだろう。手に角を持っているが、それは夢たちを真実なるものを通して運び上げてくるからである。【アンフィアラーオスの許では夢たちの扉は一つしかない。それは角でできており、真実だけしか通さない。夢の通り道の材質については古来『オデュッセイア』の記述が有名である(*Od.* 19.535-581, esp. 566)。家に帰ったオデュッセウスがまだ名乗らない段階で、彼に対してペーネロペイアが自分の見た夢について話し、12本の斧に矢を射通す競技を催すことを告げるくだり。「夢の通る門は二つあって、その一つは角で、もう一つは象牙で作られている」、前者は真実を、後者は偽りを伝える、と。乳母エウリュクレイアが足の傷によってオデュッセウスを再認した直後のことで、ペーネロペイアには相手がオデュッセウスであることはすでに分かっている。】【オーローポス、海、アレーティア／真実、オネイロス／夢からなる群像風景が別の場面と併存するのがいかにもローマ絵画である。全体の構図としては、地中に沈む場面が左下に、オーローポスの風景が右上に位置していると推測される。】

4. 研究成果

フィロストラトス『エイコネス』全80数章の翻訳註解に加え、次のような問題について考察し、さらに一部の章について再現図を制作した。同様の方法で、彫刻に関するエクフラシスの代表作であるカッリストラトス『エクフラセイス』全14章の翻訳註解も行った。

- ・フィロストラトスの人と時代
- ・第二期ソフィストたち

- ・『エイコネス』以外のフィロストラトスの作品。『ギュムナスティコス』『書簡集』『議論』『テュアナのアポッローニオス』『ソフィスト列伝』『ヘーローイコス』『ネロー』
- ・『エイコネス』
- ・『エイコネス』の構成
- ・『エイコネス』の絵画観。2つの「序」
- ・『エイコネス』の文体
- ・『エイコネス』各章絵画の様式と再現案
- ・『エイコネス』における色彩
- ・エクフラシスの歴史における『エイコネス』
- ・『エイコネス』の後世への影響
- ・『エイコネス』の伝承、校訂、翻訳、研究

- ・カッリストラトスの人と作品
- ・『エクフラセイス』
- ・『エクフラセイス』各章彫刻と再現案
- ・『エクフラセイス』の伝承、校訂、翻訳、研究

詳細は2017年刊行予定の『エクフラシス集』で公表する。

以上専ら研究代表者の活動について記したが、研究分担者と研究協力者もそれぞれの観点から考察した。今後『エイコネス』とエクフラシスをテーマとする国際シンポジウムを、内外の研究者を招いて開催する所存である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

- (1) 佐野好則「(書評) M.L. West, *The Making of the Odyssey*」『西洋古典学研究』64 (2016) 129-131。
- (2) 山口京一郎「プルタルコス「ピュティアの神託について」における観光案内人(ペリエーゲーテース)の役割」『ICU 比較文化』48 (2016) 43-61。
- (3) 山口京一郎「セネカ『自然研究』6巻における地震による地裂現象と関連表現の役割——導入部と最終章を中心に——」『西洋古典学研究』64 (2016) 50-61。
- (4) 羽田康一、松本隆、黒川弘毅、橋本明夫、赤沼潔、桐野文良、長谷川克義、三枝一将「〈リアーチェの戦士 A/B〉の色彩」『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』9 (2015) 43-45。
- (5) 佐野好則『『オデュッセイア』第22巻の求婚者殺戮場面再考——特にアンティノオスの死(8-21)とエウリュマコスの死(69-88)をめぐって——』『フィロロギカ』10 (2015) 1-13。
- (6) Sano, Yoshinori, "The First Stasimon of Sophocles' *Antigone* (332-375): Comparison with Texts on Cultural Progress", *Japan Studies in Classical Antiquity*, 2 (2014) 31-45.
- (7) 山口京一郎「地を割るポセイドン——『エイコネス』II.14, 16, 17——」『ICU 比較文化』

46 (2014) 23-46。

- (8) 佐野好則「(書評) Noriko Yasumura, *Challenges to the Power of Zeus in Early Greek Poetry*」『西洋古典学研究』61 (2013) 125-127。
- (9) 山口京一郎「カトゥルス 64 番における cupido とその関連語について」『ICU 比較文化』45 (2013) 61-69。

〔学会発表〕(計5件)

- (1) 羽田康一「〈リアーチェの戦士 A/B〉の色彩」アジア鑄造技術史学会愛知大会 (2015/8/30、中部大学名古屋キャンパス)。
- (2) 山口京一郎「地震の地裂による死の恐怖への応答と死そのものの受け入れ——セネカ『自然研究』6巻の表現手法」日本西洋古典学会大会 (2015/6/7、首都大学東京)。
- (3) 山口京一郎「大フィロストラトス『エイコネス』の絵画解説に見る3世紀地中海世界の展示観——ポセイドン・セクションの配列と説明手法に注目して——」日本展示学会第33回研究大会 (2014/6/22、三重県総合博物館)。
- (4) 山口京一郎「葡萄酒は割って飲む——古代ギリシア・ローマの酒宴と居酒屋」ペディラヴィウム会 (2014/2/22、ペディラヴィウム会、東京都目黒区)。
- (5) Sano, Yoshinori, "The First Stasimon of Sophocles' *Antigone*: comparison with texts on cultural progress", *Freedom and the State: Plato and the Classical Tradition* (2012/8/6, Oxford University).

〔図書〕(計2件)

- (1) 佐野好則「ミルトンの「リシダス」「ダモン葬送詩」におけるパストラルの伝統」『パストラル—牧歌の源流と展開—』ピナケス出版 (2013) 211-239。
- (2) Sano, Yoshinori, "The Representation of the Persian Empire by Greek Authors, with Special Reference to Aeschylus and Herodotus", in: *From Judah to Judaea*, Sheffield Phoenix Press (2012) 197-204.

〔その他〕

ホームページ：開設準備中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

羽田 康一 (HADA, Koichi)
東京藝術大学・美術学部・講師
研究者番号：30240724

(2) 研究分担者

佐野 好則 (SANO, Yoshinori)
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号：50295458

(3) 研究協力者

山口 京一郎 (YAMAGUCHI, Kyoichiro)